The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ギリシア・ローマ神話学研究会 設立の趣意と基本方針
Author(s)	内田, 次信
Citation	神話学研究. 2017, 1, p. 137-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ギリシア・ローマ神話学研究会　設立の趣意と基本方針

ギリシア・ローマ神話学研究会　代表　内田次信

かつて、十九世紀から二十世紀初頭にかけて、タイラーやフレーザーは、神話を、「原始人」の間で行われた、世界に関する前科学的な説明法と見なした。そしてそれは、現代の科学に取って代わられつつあるとした。ロバート・A・シーガルが言うように、神話を、昔の迷信的な思考体系にすぎないと見る彼らの説が正しかったら、神話は今日までにとっくに死んでいたことだろう。また、古代の神話は、「合理的」、科学的な理論になじんでいる現代の読者によって、笑われる対象でしかなかったかもしれない。ところが神話は、現代でも生産され続けていると言うべきであるし、昔の神話はいまなお、老若男女を問わず、われわれを惹きつける何かを有している。古代の神話が、われわれにとっても無関係ではないと思わせるのはなぜか、その永遠の存在理由を人は問うのである。この問いをひとつの大きなきっかけとして、神話研究は行なわれる。

神話は死ななかった。むしろ、人類が存続する限り、おそらく、神話は作られ続け、読まれ続け、考察され続けるであろう。科学と効率主義が浸透しつつある現代社会において、論理と合理性だけではわれわれは満足を得られないという人間心性の真実が、ますます明らかになりつつあるように思われる。神話の意義を問い、神話学を通じてその秘密に迫る努力をすることを、時代状況が促している。

神話学とは、人間研究の一形態である。人間は、他者を、また自分自身を、また自己と他者との関係を、どのように見て、どのようにそれとかかわり合ってきたか、またしようとしてきたのか？ 体験、感性、記憶と思考の総合的精神世界が、複雑かつ霊妙な言語体系を踏まえて組み上げられる物語世界を生み出し、またその後でそれと相対することになる。そのようにして作られるもの、またそれを作るもの、またその相互の関係の考察を、神話研究は行う。

神話学の研究領域には、神話の本質論やその研究史・メタ批評論のほかに、それぞれの神話の内容や個別的発展・成立の過程を考察することももちろん含まれ、さらには、神話を生みだす客観的条件の数々、つまり神話の背景にあると見られる社会や、その形成を左右し思考傾向に影響を与えうる自然現象――凶作や地震など――も、視野の一部に含められうる。そのような外的環境とのかかわり方が、神話という、人間固有の表現法に反映されることがあるという限りにおいてである。人間の生にかかわる人間自身の表現であるという意味から、神話が、「実存」的その他の、主体的な側面を帯びうることも、忘れてはならないであろう。

神話の語を、狭い範囲に限って用いねばならない必然性はない。「神話」・「伝説」・「昔話」の各語をめぐる定義論には立ち入らないが、ここで言う「神話」は、近代の用語としての狭義の「神話」を初めとするこれら三種類全てを包摂しうる。さらに、物語的・文学的な「神

話」は、ほかの多くの精神領域の活動と、あるいは言説のカテゴリーと、重なり合う。西洋古代においては伝統的に、「神話＝ミュートス」と、とりあえず知的言説と見なされる「ロゴス」とが区別され、対峙させられたが、両者の差異はじっさいは、哲学者プラトーンの「ミュートス」志向などに見られるように、しばしば境界があいまいになる。ヘーロドトス流の歴史を「ミュートス的」と一蹴するトゥーキューディデースが、例えばペリクレースを理想化し、さらに彼やその他の人物に著作中で仮想演説をさせる点などにおいて、彼自ら「ミュートス的」要素を示していないか、明言的な弁護は困難である。古代から現代まで通観して、宗教上の「信仰」や、政治的な「主義」も、広い意味での「神話」を表わしてきたと見ることが許されるであろう。最も懐疑的な立場の論者からは、現代の科学もひとつの「神話」と呼ばれうる。最後の点はともかく、物語あるいは虚構世界を必要とし、それがなければわざわざ創造する本性を持つ人類にとって、「神話」は、ほぼあらゆる精神領域に共通するマトリックス（母型）になっていると見られる。

以上の説は、たぶんにポストモダン的と聞こえるかもしれないが、ここではその理論に賛同を表明しているわけではない。われわれが言おうとしているのは、神話という見極め難い対象を考究する方針として、ある特定の理論を崇めそれに縛られた視座に固執するのではなく、むしろ、先入観にとらわれない、柔軟な、そして多種多様なアプローチ法を許容する度量の大きな研究態度が推奨されることを基本認識とするということである。そしてこれが、この研究会の基本方針である。

本「ギリシア・ローマ神話学研究会」は、大阪大学大学院文学研究科の文芸学研究室を母胎としつつ、そのほかの諸種の学問分野や、研究者の所属区分を超えた広がりのある学的活動を志向する。本研究室で西洋古典学を主たる研究対象のひとつとしてきた伝統に鑑み、ギリシア・ローマの神話と神話学が中心的位置に据えられるが、豊かな神話世界を有する西洋古典関係の研究資料自体が広大な学問領域に及び、また厚い学的蓄積を誇っている。さらに後世の受容の点でも、欧米のみならず、わが国においても、豊かな考察材料が見いだされる。しかしまた、本研究会では、必ずしもギリシア・ローマの神話を中心主題にしなくとも、それと多かれ少なかれ接触し、絡み合う他圏の神話例や、他の範疇の文化現象も、対象にされうる。そのような側面からの研究は、西洋古典学にとっても有益な寄与となりうるのである。

ギリシア・ローマ神話を中心としつつも対象を狭く限定はせず、広い視野の下に関連する諸領域も積極的に取扱い、ある方法をほかの見方より固執的に優先することを避けて、自由・柔軟で開かれた研究態度を保持しつつ、発展性のある議論を進めることを目標に置いて、現代の一般的な「神話への問い」に、研究者の側から何らかの形で応答してゆく試みを、ギリシア・ローマ神話学研究会では追求する。